

# 『中国語会話〈入門編〉』に対するいくつかの提案

川 澄 哲 也

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第41巻第2号（抜刷）  
2022年3月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 41 No. 2 March 2022

# 『中国語会話〈入門編〉』に対するいくつかの提案

川 澄 哲 也

## 1 は じ め に

松山大学の言語文化基礎科目「中国語 1 / 2」では、全学共通の統一教科書として『中国語会話〈入門編〉』（孟子敏・張全真・増野仁，郁文堂，2014 年）を用いている。この教科書は大きく「発音篇」と「本篇」に分かれ、「本篇」には課文や練習問題のほかに「生字 Shēngzì（新出漢字）」「小知识 Xiǎozhīshi（豆知識）」等の様々なセクションが含まれている。本稿では、筆者が本教科書を使用する中で考え付いた事柄の幾つかを記しておきたい。

## 2 「発音篇」をめぐって

### 2.1 提案の背景

一般的な初級中国語の教科書では、発音部分はピンインを一通り体系的に学ぶ方式を採用している。これに対して『中国語会話〈入門編〉』では巻頭「はじめに」で以下の方針を明示している：

巻頭の「発音篇」は、通常とは異なり、日本語で育ち日本語で生活している学習者にとって、極めて重要かつ難しい点を、段階を追って把握してもらう方法を採用しています。したがって、日本語式の発音でコミュニケーション上問題が生じない音素などはあまり説明しないようになっています。

この方針自体に対し筆者は異論を持たない。しかしながら本教科書では、「極めて重要かつ難しい点」として筆者が第一に考えている音が相応の扱いを受けていない。それは円唇後舌狭母音の /u/ [u]<sup>1)</sup> である。

単母音の /e/ [ɤ], 或いは /z, c, s/ の後の /i/ [ɪ] のように、日本語に存在しない音声については、その特異さゆえに意識が向きやすく、学習者は習得に注力する。一方で、一聴したところ日本語に類似の音声がある（と感じられる）ものに関しては、その日本語音で代用してしまうという事態が起こりやすい。それが、/a/ や /mo/ のような「日本語式の発音でコミュニケーション上問題が生じない音」であれば構わないが、表面上似ている（と感じられる）ものの実際には重要な違いがある音まで安易に代用してしまうと、コミュニケーション上問題が生じ得る。この意味で筆者が最も関心を払ってきたのが、上述した /u/ [u] である<sup>2)</sup>。

本教科書では中国語 /u/ に対し、「中国語の「-u」は日本語の「ウー」で発音してかまいません。ただ、中国語の方が、唇の丸めが強いのですが。」(p. 9) と記述し<sup>3)</sup> 但し書きこそあるものの、日本語音での代用を認めている。しかし、日本語の「ウ」は一般に、非円唇後舌狭母音の [u] に近い音で発音される。そのため、日本語「ウ」を中国語のなかで使用した場合、円唇の /u/ [u] ではなく、非円唇の後舌半狭母音である /e/ [ɤ] と聞き取られる蓋然性も高い<sup>4)</sup>。

## 2.2 「発音篇」に対する一提案

このようなコミュニケーション上の問題を回避するために、中国語の単母音

1) 本稿では、ピンイン表記に言及する際にはアルファベットを / / で括り、実際の音声については国際音声記号を [ ] 内に記して表す。

2) 中国語音声学の詳細な解説書である日下（2007）でも、[u] は「日本語話者のいちばん不得意な母音」(p. 99) であると指摘されている。

3) 但しこの記述も、「zi/ci/si」に対する説明の中でついでに触れているのみで、/u/ を立項して説明しているわけではない。

4) 日下（2007）の p. 98 や p. 100 には、中国語 /e/ に対してであれば日本語「ウ」で代用が可能であるという旨の記述が見られる。


/u/ についての「発音篇」での扱いを改めることを提案したい。

一般に中国語の /u/ [u] の発音法については、「唇をしっかりと丸める」というような説明がなされる。しかしながら、中国語らしい [u] 音を発するためには、唇の外形に加えて、口腔内に音が共鳴するためのスペースを形成することも意識しなければならない<sup>5)</sup>。いくら唇を丸くすぼめても、歯がかみ合っているなどの原因で口腔内に十分な空間がない場合は、音が口腔内で響かず、中国語 /u/ の音色とはならない。この2つの要点を教授するために、筆者は授業で以下のような PPT スライドを提示して指導している<sup>6)</sup>。

### 2 単母音


a   o   e   i   **u**   ü  
(yi)   (wu)   (yu)

**唇をしっかりと丸めて“う”**  
(ストローでジュースを  
飲むときのような形)



**中国語の[u]は、日本語の「う」で  
代用しないこと！**

唇はすぼめて  
あまりけないが、



口の内部では  
大きな空間を作る。  
(舌の上にゆで卵をのせるような感覚)

**中国語の[u]は、口の内部に音がこもる感じ**

本教科書を改訂する機会があれば、上述した内容等を参考に、/u/ に対して適切な説明を加えて頂きたい<sup>7)</sup>。

5) 日下 (2007), p. 100 参照。

6) 筆者はピンインの教育を行う際、『中国語会話〈入門編〉』とは別に教材を用意し、体系的に記号の読み方を指導する方法を採っている。以下のスライドはそのような授業の中で用いているものである。

7) 一点細かい補足をしておくと、/f/ [f] に後続する /u/ のみは例外的な発音となり、[ʏ] (成節化した [v]) くらいの音で実現する。これは、円唇の [u] で発音してしまうと、[f] の調音に必要な上歯と下唇の接触が困難になるためであろう。

### 3 「本篇」(課文部分) をめぐって

#### 3.1 提案の背景

中国語の形容詞<sup>8)</sup>の用法には、日本語話者から見ると特殊なところがある。日本語の形容詞は「限定」と「描写」の2用法を有するが、中国語の形容詞は、それ自体では「限定」しか表さないのである。そのため、「新しい本」「白い花」のような、描写用法の形容詞を含む日本語を中国語で表すには、“新的书”“白的花”のような訳出では対応できない。これら中国語は「新しい(ほうの)本」「白い(ほうの)花」を意味するからである<sup>9)</sup>。

中国語の形容詞はこのような性質をもつため、描写用法に用いるためには“一手間”を加える必要がある。例えば形容詞述語文に対して、多くの教材では、以下のような説明を加えている：

中国語の形容詞は、単独で(=修飾語なしで)平叙文の述語になると、「比較・対照」等の意味合いが出ます。この意味合いは、前に“很”等の副詞がある場合には生じません。(川澄 2021:159)

“今天冷。”は「今日は(、他の日と比べて)寒い。」のような対比的な意味になり、純粋に「今日は寒い。」とだけ言いたい場合は副詞“很”を加えて“今天很冷。”と表現することになる<sup>10)</sup>。

しかしながら、形容詞には原則“很”を加えて用いる、という文法は、そのようなルールを持たない言語にしか触れてこなかった学習者にとって、かな

8) 中国語学では一般に形容詞を「性質形容詞」と「状態形容詞」に分けるが、本稿では入門段階に頻出する前者のみを指して「形容詞」と称することとする。

9) この用例および解釈は中川(1996), pp. 160-161に基づく。

10) 副詞を加えると対比の意味が弱まることは、日本語の知識でも確認できる。例えば、単に「大きい!」と言った場合には、あるモノが大きいという描写の意味合いに加えて、他と比べて大きい(大きすぎる)という対比の意味合いも汲み取ることができるのに対し、「とても大きい!」とした場合には対比の解釈が難しくなる。

か定着するものではない。この文法について如何に意識づけを行うかは、中国語入門段階の一大課題である。

### 3.2 「本篇」(課文部分) に対する一提案

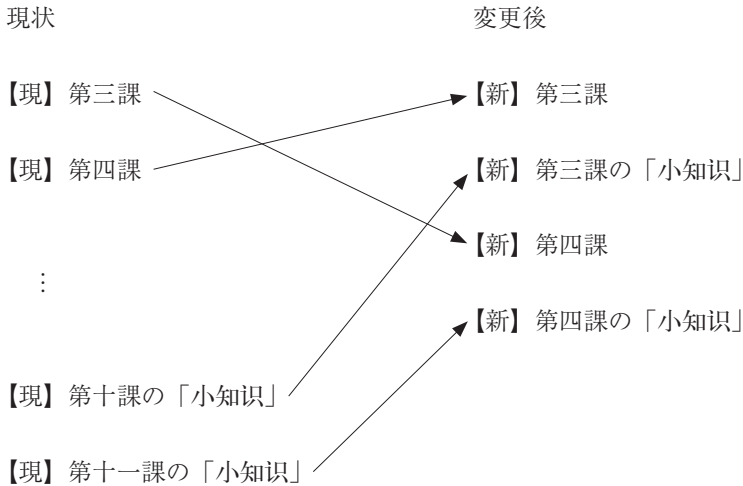
以下では、上記の課題に対する一方策として筆者が構想している教案を述べてみたい。

中国語入門期に学ぶ形容詞関連表現としては主に「形容詞述語文」と「連体修飾」がある。現在出版されている初級中国語の教材では、ほとんどの場合、前者を学んでから後者を習うという配置であるが、これを逆にすれば、現在よりは先述の「意識づけ」がし易いのではないだろうか<sup>11)</sup> というのが筆者の提案の要点である。例えば、まず“好的词典”が「良い(ほうの)辞書」「(他と比べて)良い辞書」の意味であることを紹介し、中国語の形容詞は描写ではなく限定として機能する点を教授する。それを踏まえて“你的词典好。”のような形容詞述語文を導入し、ここにおいても形容詞は限定の機能を果たし、「君の辞書は(、他の辞書と比べて)良い」のような意味になることを確認する。そして描写的な表現にしたい場合には(、脚注10で述べたような事実にも触れつつ)“你的词典很好。”としなければならないと説明する。このような流れを構想している。

『中国語会話 〈入門編〉』でこの教授法を可能にするためには、中身の大幅な書き換えは必要なく、既存の内容の順序を入れ替え(、一部記述を調整す)るだけで良い。現状では第三課で形容詞述語文、第四課で連体修飾の“的 de”という順に学んでいるが、まずこの2課を入れ替える。併せて、現状では第十課、第十一課に置かれているセクション「小知识」を以下のように配置転換す

11) 換言すれば、“今天冷。”が「今日は(、他の日に比べて)寒い。」という意味であることよりも、“新的书”が「新しい(ほうの)本」の意味であることの方が、日本語の感覚で捉えやすい(日本語と共通性がある)ということである。また、知識が定着していない学習者に対し繰り返し確認する際の挙例としても、簡便に扱える後者の方が適していると考ええる。

る。この2セクションはそれぞれ、「名詞+“的 de”+名詞」「動詞／形容詞+“的 de”+名詞」をテーマとしたもので、現状より早い段階に配置すべき内容である。



この組み替えにより、以下のような教授の流れが可能になる：

- ① 【新】 第三課で「名詞+“的 de”+名詞」について学ぶ。
- ↓
- ② 【新】 第四課に入り、まず「小知识」を利用して「(動詞/) 形容詞+“的 de”+名詞」を補足しつつ、中国語形容詞の特性を教授する。
- ↓
- ③ ②で論じた特性を踏まえ、【新】 第四課「課文」部分で形容詞述語文を学ぶ。

本教科書を改訂する機会があれば、上述した内容について一考して頂きたい。

## 4 「本篇」(セクション部分)をめぐって

### 4.1 提案の背景

松山大学では2020年度より、言語文化講義科目「初習言語文化研究(〇〇語)」が新設された。これは、語学を学ぶ中で適宜文化についても触れるという従来の語学科目のスタイルを反転させ、“文化事象を中心に扱いつつ、その中で語学への理解も深める”という狙いをもった科目である。中国語に関しては、立ち上げ後の2箇年度は筆者が担当してきた。

担当するにあたり、筆者はこの科目を「講義科目」と「実技科目」の中間に位置づけることとした。講義科目と銘打っている以上、講義を主とするべきではあるが、言語文化科目でもあるからには、言語技術の向上にも資する内容であるべきだと考えたからである。そのため、毎回の授業の3分の2程度の時間で文化に関する講義を行い、残りの約3分の1は(出来る限り当日の文化講義の主題とも関わる)語学の学習・復習にあてることとした。例えば2021年度の具体的な授業構成は以下の通りである<sup>12)</sup>：

回数	文化講義の主題と梗概	語学の学習内容
2	<b>中国の文字 [1]</b> ：甲骨文字から簡体字に至る、3000年以上に渡る漢字の書体変遷を概観する。また漢字の構成原理や簡体字の造字法を理解する。	造字法に基づいて、「中国語1／2」で学んだ簡体字を分類する。
3	<b>中国の文字 [2]</b> ：近代から現代にかけて行われた漢字廃止運動の流れ、及びその中で考案された各種の表音文字について学ぶ。	ピンインのうち、/e/や/zi/等、用字法が特殊なものの発音を復習する。
4	<b>中国語のなかの外来語</b> ：表音文字をもたない中国語が外国語からことばを借用する際、如何なる方策をとるのかを理解する。	「中国語1／2」で学んだ外来語を復習しつつ、その造語法を分析する。
5	<b>中国語の諸方言</b> ：中国の7大方言の特徴を学ぶ。また、中国語の見方の1つとして故橋本萬太郎博士が提唱した「言語類型地理論」の概要を知る。	そり舌音など、普通話の土台である北方方言に特徴的な発音を復習する。

12) 初回は授業案内に充てるため、含めていない。



回数	文化講義の主題と梗概	語学の学習内容
6	<b>中国のあいさつ文化</b> ：中国人同士では“你好”や“谢谢”をあまり使わない理由や、中国人が日常実際に用いるあいさつについて理解する。	「中国語1／2」で学んだあいさつや、各種疑問文への応答法を復習する。
7	<b>中国人の「モノの見方」</b> ：中国人の伝統的な世界観が如何なるものであるかを、それが反映された行動事例に触れつつ学ぶ。	「中国語1／2」で学んだものも含め、様々な量詞を学習する。
8	<b>中国の芸術</b> ：文学を除く、絵画や書道といった芸術分野の代表的作品を鑑賞する。また西洋の芸術と比較し、中国芸術の特徴を考える。	「中国語1／2」では学ばないが、検定試験で頻出する「存現文」を学習する。
9	<b>中国の地理</b> ：代表的な河川や山、都市に触れつつ、中国の地理特徴を学ぶ。あわせて中国にある様々な世界遺産についての知識も深める。	「中国語1／2」で学んだ存在表現、及び各種の方位詞を復習する。
10	<b>中国の料理文化</b> ：中国の4大料理の特徴を学ぶ。また古代から現代にかけての食材や調理法の変遷・発展を概観する。	形容詞の用法や、形容詞と大きく関わる「比較構文」を復習する。
11	<b>中国の歴史</b> ：中国史の大まかな流れを学んだ上でその“反復的”な側面を理解し、そこから中国の今後をも予測してみる。	中国語におけるテンス・アスペクト表現の特徴を学習する。
12	<b>中国の少数民族 [1]</b> ：民族識別史の概要を学ぶ。また中国55種の少数民族のうち、モンゴル系やチュルク系等、北方に分布する21民族を概観する。	名詞述語文や連動文といった、残された重要な文法事項を学ぶ。
13	<b>中国の少数民族 [2]</b> ：中国55種の少数民族のうち、チベット系やタイ系といった、主に南方に分布するもの34種を概観する。	受動表現や使役表現などの、残された重要な文法事項を学ぶ。
14	<b>中国の文学 [1]</b> ：中国文学のうち、20世紀以降の代表的作家やその作品について学ぶ。また少数民族作家による作品への理解も深める。	短編作品を利用して、ピンインのない中国語原文の読解に挑戦する。
15	<b>中国の文学 [2]</b> ：漢賦、唐詩、宋詞、元曲、明清白話小説といった、清代以前の中国文学の流れを理解しつつ、その特徴を考える。	現代語の知識で対応可能なレベルの白話文の読解に挑戦する。

この講義科目を運営する中で最も課題だと感じているのが、関連する教材の不足である。現状では毎回、自作の資料を取りまとめて使用しているが、もし本授業で、文化の講義時にも『中国語会話〈入門編〉』を利用できれば多少とも便利であろうと考えている。

## 4.2 「本篇」(セクション部分) に対する一提案

すでに触れているとおり、『中国語会話〈入門編〉』本篇には各課に「小知识」というセクションがある。ここには、語学に関わる一歩踏み込んだ知識のほか、中国文化に関する話題が提供されている。そのため、文化講義の“取っ掛け”として「小知识」が利用できるのではないかと考えている<sup>13)</sup> 現状でも、例えば第6回“中国のあいさつ文化”を始める際、p. 23の「(“你好”は-筆者補) 中国人どうしの場合(中略) ふだんほとんど使われません」やp. 45「(“谢谢”は-筆者補) 中国人どうしの間ではやはりめったに聞かれません」という記述を確認してから話を始めるようにしている。あくまで“取っ掛け”としての利用であるため、この程度の記述でも十分に役立っている。

現状では、文化に関する「小知识」としては、上述した「あいさつ」のほか、「料理」や「言語」を扱ったものがあるが、これら以外の大部分の「小知识」は、語学に対する“補足”である。但し、補足とは言え、中には1年次の学生には必ずしも必要と思われない、高度な内容も含まれている。本教科書を改訂する場合には、これらの高度な「小知识」を中心に内容を適宜改変し、2年次以降の「初習言語文化研究(中国語)」の授業にも活用できるようにしてはどうかと考えている。

## 5 お わ り に

それぞれの教科書には著者の思いが込められているため、万人にとって使い勝手が良い訳ではないのが通例である。そのため本稿では、筆者の考えのうち、特に改訂を希望する箇所についての提案を記すにとどめる。今後この教科書が更に有為なものとなり、松山大学の中国語教育の発展に寄与することを願う。

---

13) 授業の後半で語学学習が入るため、「初習言語文化研究(中国語)」の授業には原則、1年次に使用した『中国語会話〈入門編〉』を持参してもらうようにしている。そのため、文化の講義時に本教科書を参照することは可能である。

## 【補記】

以下に述べることは、本来であれば本稿第2節に記すべきであるが、脱稿直前に書き加えようと思い至った内容であり、第2節に適切に入れ込めなかったため、「補記」という形で追加したい。

ピンインを体系的に扱う教材においては通常、子音の教授について、/b, p, m, f/ → /d, t, n, l/ → /g, k, h/ → /j, q, x/ → /zh, ch, sh, r/ → /z, c, s/ という順番を採用している。これに対し筆者は、最後の2組を逆にして、/z, c, s/ を学んだのちに /zh, ch, sh, r/ (そり舌音) に進むようにしている。この順序の方が、そり舌音の習得がスムーズであると実感しているためである（なお筆者がこの順序を取り入れているのは、日下2007, pp. 113-121 「『そり舌音』は“zi, ci, si”のあとで」に啓発された結果である）。

具体的な指導法は以下の通りである。まず、/z, c, s/ の基本的な音声について教える（/z/ は日本語「ツ」の子音 [ts], /c/ はその有気音 [tsʰ], /s/ は「サ」の子音 [s]）。その後、読み方が特殊な /zi, ci, si/ に言及する。この3種のピンイン中の /i/ については、舌尖母音 [ɿ] という、日本語には無い発音であるが、「イ」を出すつもりで唇で「ウ」を発音する」という説明で、多くの学習者は対応できる。そして、ここを出発点として以下のような説明・練習を行うと、そり舌音の発音要領も体得しやすい。例えば /si/ と /shi/ で話を進めると、まず /si/ [sɿ] を出してもらう。その際には、「舌端」が歯茎後部辺りと向き合っているはずである。その状態から、平唇の形状は維持したまま、舌端が向き合っている位置（＝歯茎後部）に「舌尖」を持って来るよう指導する。すると、比較的容易に /shi/ の音が出せるはずである。

従来の中国語教育では /sh/ (を始めとするそり舌音) を教える際、「舌を反らせて」とか「舌をスプーン状に」のように、舌全体の形状を意識させる説明が主流であったが、それよりも、/s/ と /sh/ では調音の際に使う舌尖の部位が違うのだと教える方が伝わりやすいと感じている。

この点に関し、『中国語会話〈入門編〉』発音篇では幸い、一般のピンイン教材とは異なり、/z, c, s/ の後にそり舌音を配置している。改訂の機会があれば、上で述べた教授法の説明を組み入れることを検討して頂ければ幸いである。

## 参 考 文 献

- 川澄哲也 (2021) 「『中国語会話〈入門編〉』文法説明教材 (稿)」『言語文化研究』第40巻第2号: 157-178.
- 日下恒夫 (2007) 『アタマで知り、カラダで覚える 中国語の発音』東京: アルク.
- 中川正之 (1996) 『はじめての人の中国語』東京: くろしお出版.

\* 本稿は 2021 年度松山大学特別研究助成による成果の一部である。